

未来派の宣言文を読む

土肥秀行

本稿と、本稿に続く5本の論考からなる未来派関連特集は、2021年3月18日に立命館大学衣笠キャンパス図書館で行われた研究会「イタリアにおけるモダンとアヴァンギャルドの相克 I—未来派の宣言文を読む」を機にして組まれている。

このタイトルに含まれる“モダン”にしても、“アヴァンギャルド”にしても、語圏を越え、ヨーロッパ全域で通用する語である。しかし、その指し示す内容や時代にばらつきがあり、たとえば英国とイタリアのケースを比較すると、前者でいうところのモダニズムは、それに対応するはずの伊モデルニタの対極にあるとみなしうるほどだ。普段は「縦割り」で各語圏の地域研究に従事する専門家は、対応概念のずれに、トランスナショナルな比較対照を通してはじめて気付くことができる。

さらに国ごとの事情の違いに触れておくと、日本においては、用語としてはモダニズムが一般的であり、そこで意識されるのは英語圏で認められた革新性である。イタリアはというと、モデルニタは、モダニズムの翻訳概念のようであってそうではなく¹⁾、むしろ、英語圏のモダニズムに拮抗して、同時代的なアヴァンギャルドからの揺り戻しを指す。このギャップを認識してはじめて、共通言語としてのモダニズム理解へと踏み出せる。確かに、世紀末から大戦間期までのヨーロッパは、コンパクトかつグローバルな文化圏を形成していた。各地域の文化を担う少数のエリートは、即応性のあるメディアとして発達した雑誌文化を介してつながり、知己を深め、協働に努めていた。であっても収斂をみずに、国や言語によって認められるモダニズムの意味内容の濃淡は、モダンそのものに内在する新旧の共存に由来しており、各国語での意味範囲のずれは、個々の文化歴史的コンテキストに左右されるだけではない。モダン概念の根底には、言語と地域に寄らない、絶対的なゆらぎがある。

こうした認識に立ち、本特集においては、語圏横断せずとも、イタリアという単一の領域において、すでに認められるモダン概念のゆらぎを追っていく。他に先駆け前衛芸術運動が展開されたイタリアでは、革新性と前時代性の関係が整理つかぬまま、前衛とモダニティの対照性ある並存が、1910年代から1920年代までに生じている。そのせめぎあいだが、先に挙げたテーマ「イタリアにおけるモダンとアヴァンギャルドの相克」にあらわれているのである。このテーマのもとにある本特集を担う研究会の場にて交わされる議論の射程には、イタリアという特定の文脈における歴史的・概念的検証を通じ、他国の類例とも比較検討しうる前衛観ならびにイタリア版モダニズムの提示も含まれる。

研究グループ内の共通意識の醸成から、次に具体的な個々の作業として、「未来派の宣言文を読む」ことになるのは、未来派の宣言文こそが新しくもあり、また古くもある、という理由に尽きる。宣言文とは申し開きであり、そこでは実作との関わり合いが意識される。一方で、それそのものにより、宣言文は、自律した意義をもつ。前者の観点からは、宣言文は創造性をリード、あるいは後追いし、後者の観点からは、宣言文は単体で創造性を発揮する。言説が実作に持ち越されるパターンは、決して新しくはない。自身の創作意識に自覚的で、それを表明しようとする例は、ヨーロッパ文学の起源であるダンテにすでにみられるものであった²⁾。19世紀後半のモダン概念にもとづく「マニフェスト」（宣言文）は、言葉から行為へとむかう。反対に、主張の具現が実作ではなく、その主張文そのものにあると考えれば、未来派にとって、宣言文こそがまずもって表現となるのである。

イタリアの未来派では、宣言文が起点となり、実際の創作活動が展開されるパターンを現代に生んだ³⁾。そればかりか、実践を凌ぐインパクトをもち、コンセプト先行型となる可能性とリスクを生んだ宣言文であるが、芸術家当人のみならず研究者にとっても、実作との関係は客観視しにくいものである。製作者＝執筆者当人にとって、宣言が真なのか、実作が真なのか。また研究者は、創作の意図を宣言文の言説に読み取ろうとしていないか、作品の裏をとり宣言文を取り上げていないか。

なにより作者の言葉は重要であろう。しかし未来派が対象とした絵画、彫刻、文学、音楽、映画、写真、舞踊などにおける実作との関係を云々しようとする、すぐに宣言文のテキスト独自の表現に気づく。言葉が実作を越え、実作よりも過剰（過激）となってさえいる。翻って主張を実作に反映するのは不可能にみえる。そこでは宣言文の自律を認めることとなり、これは起草者自身も半ば意図するところであった。実態をこえるテキストの過剰により、本来は実作に励むべき表現者は、いささか不可解な事態を招いてしまう。実作とロゴスの乖離があってもよいとするのは一貫性の放棄であり、「責任逃れ」であろう。この背景には次に挙げる要素があると考えられる。起草者が、そもそも言葉の人ではなく、他分野からペンの世界へと「侵入」している。またしばしば書き手が連名であり、しかも複数分野からの集まりである。それに文人であっても、たとえば創始者マリネッティが韻文から、政治的起源をもつ「宣言」（マニフェスト manifesto とは語源的に、あきらかにするもの、である）へとむかうとき、やはり越境がみられる⁴⁾。「明白」なる宣言の主体が旨とするところは、もはやトロバドゥール以来のモットー「閉ざされた詩学」trobar clus ではなくなっているからである。そうした異分野の手によって、宣言文は、独自の「表現」となり、未来派の固有性を構築する。

宣言文が、いわゆるプロの文筆家によるものではないことから生まれる「軽み」や、多ジャンルの芸術家からなるハイブリッド性、そこで主語が「わたし」から「われわれ」となる複数性に加え、時局に応じて用意されるジャーナリスティックな即応性、そして直接掲示も可能とする発表形態の簡便さとコンパクトさもまた、テキストを特異なものとする。連署においては各人の責任は決して重くなく、しかも短い文章があまりスパンを設けずに発表されていくのであれば、ひとつのテキストが別のテキストを生む連鎖が起こる。テキストの自己増殖ともいえ、内容の重複も辞さない。

宣言文を量的に語るならば、その数は300をこえるといわれる。数を確定するのは、変異体

をいかにカウントするかに依るため、実際難しい。クルスカ学会がまとめた未来派コルプスには214のテキストが見出せる⁵⁾。別のデータでは、175の書き手がいて、38の未来派系の雑誌が創刊されたとされる⁶⁾。幾多ものテキストに対し、日本語への翻訳が、1980年代から1990年代にかけて複数の機会に分けて進められたが、まとまったかたちでの刊行物は存在しない⁷⁾。未来派の書誌に通暁し、宣言文を日本語で参照しやすくする出版をめざすというのも、本特集のメンバーからなる研究会が掲げる目標である⁸⁾。

宣言文の特異性は、時代柄もあり⁹⁾、直接行動に結びつくことに見出される。すでに詩人ダンヌンツィオのふるまいが、新聞や雑誌メディアで取り沙汰されて社会現象化していた。これは文学が産業化するのと並行し、本は「商品」となっていったからである。芸術のパフォーマンス性が意識される時代に、未来派詩人マリネッティは言葉を、意味作用でなく、オノマトペや発話によって行為そのものとする。示威行為そのものである「未来派の夕べ」は、運動の発足当初より積極開催されるほどに、芸術的「行為」とみなされている。

未来派の言葉が行為となるどころか、ある種の暴力性すら帯びるのは、運動の興りに、イコノクラスムすなわち過去（主義）への強烈なNOが伴われているからである。暴力性が発揮されるピークは、第一次世界大戦の勃発から数ヶ月遅れて、イタリアで中立主義から参戦論へと未来派によって世論が変化する機会に、達せられる。

本稿には、初訳となるマリネッティ著「戦争、唯一なる世界の衛生法」が付されている。未来派創設後、政治的アジェーションに満ちた「未来派の夕べ」や、小説『未来派人マファルカ』の猥褻裁判について書き連ねた仏語本¹⁰⁾の伊訳版として、一次大戦参戦へと傾きつつあった1915年に出版された書『戦争、唯一なる世界の衛生法』の表題作である。この書が評判となったのは、訳出した文書に直接学生にうったえているくだりがあるように、社会一般の潜在的な参戦機運に適合したためであろう。

もちろんこの語呂のよい表現「戦争、唯一なる世界の衛生法」(la guerra, sola igiene del mondoは11音節句)が書名となったことに、成功の直接的な秘訣はある。このモットーを自らの「商標」とし、マリネッティは徐々に大衆の認知を育んだ。その初出は、1909年の第一宣言内、さまざまな要素の詰まった第九条においてである。

われわれが称えるのは、戦争、唯一なる世界の衛生法である。同じく、戦闘、愛国、自由主義打破となる行為、命がけの理念、女性への蔑みを賞賛する¹¹⁾。

第一宣言からほぼ一年、「戦争、唯一なる世界の衛生法」とのフレーズは、1910年のミラノでの第2回目「未来派の夕べ」（1910年2月15日）に再登場する。独逸との三国同盟離脱と、イタリアの植民地政策の強化を訴えて戦争行為を擁護し、反対意見の野次に応酬する際に、会場で叫ばれるのである¹²⁾。1911年のフライヤー「戦争、唯一なる世界の衛生法のために」¹³⁾は、伊土戦争を支持し「汎イタリア主義」をうったえる短文である（ここで訳出したものとは異なる）。そして、一次大戦への参戦論を喚起するための1914年のビジュアル詩「未来派的総合による戦争」¹⁴⁾は、「われわれにとって唯一の世界の衛生法たる戦争」からはじまる。

戦争に際しては必ず使われる、まさに攻撃的な文句である。「戦争＝衛生法」と言い換えるとき、

マリネッティは自己反復的であり、自らを引用する。あのメトニミーを考案した未来派マリネッティであると、自己アピールするのである。「宣言」のつかない宣言文であるが、それは正にこのフレーズが自己を表現するものとなっているからである。よってマリネッティその人自身をあらわす文書をここでは取り上げている。

あわせて、自己の表出となる宣言文の例を、未来派（批判者はときに「マリネッティ派」と呼んだ）から距離をとった同時代の前衛運動¹⁵⁾にみてみたい。それがここに訳出した第二の文書、ゲラルド・マローネ起草「勇者宣言」である。未来派との距離には、それぞれが拠点としたミラノ（そしてローマ、フィレンツェ）とナポリの地理的距離（北部と南部の違いも重ねられる）も反映していよう。しかし、いかに未来派との違いを強調しようとも、皮肉なまでに未来派と同じ手法に依ってしまう。新たな文芸誌の初号の巻頭におかれるもの、それは正に宣言でなければならないとの発想は、未来派ゆずりである。おそらくマローネのねらいは、その皮肉、パロディのひきおこす効果におかれているであろう。マリネッティがアフリカなら、マローネはインドを使ってうったえる。雑誌『ラ・ディアーナ』は日本の詩を掲載するなど、当時の異国趣味を反映していた。さらに皮肉なことに、「勇者宣言」にある“勇者”ardimentosiは、こののち、大戦中に編成され、好戦家にとってシンボルとなる「突撃隊」Arditi（“勇士”の意）と響き合うことになる¹⁶⁾。しかし、先に訳出した同年の「戦争、唯一なる世界の衛生法」とは異なり、戦争からは距離をとっている。

あえて未来派外の宣言文を紹介するのは、すでに各分野（文学・美術・写真・映像・舞踊）への展開により多面性ある本特集の研究会に、パラ未来派的アングルでもって厚みを加えるためである。この厚みは、モダニティと前衛の関係にも似た、未来派とその周辺諸派の「未来派度」スペクトラムによって生じるのである。

注

- 1) イタリアでは、モダニティの訳語“モデルニタ”が英“モダニズム”に対して用いられる。というのもイタリアで“モデルニズモ”という、カトリック刷新運動あるいは神学刷新運動（modernismo cattolicoあるいはmodernismo teologico）を指し示すからである。同時代の文学への影響として、小説家アントニオ・フォガツァーロの例が挙げられる。彼の出世作、1901年の『この小さきモダンな世界』*Piccolo mondo moderno*と、1905年の続編『聖者』*Il santo*に、モデルニズモに対する批判的な反応がみられる。
- 2) 自身の詩語を探求する『俗語詩論』*De vulgari eloquentia*（1302-1305年）は、詩作に用いられる俗語ではなく、ラテン語で書かれている。
- 3) よって運動の誕生日が特定可能となる。第一宣言の『フィガロ』紙掲載日（初出ではない）である1909年2月20日となる。はじまりが特定の日付でもって強調されるにつれ、運動の収束日を定める衝動も生まれる。それは、自身と運動の同化を、1920年代から1930年代を通して強めていく、主宰のマリネッティが亡くなった年に重ねられる。1944年（12月2日）である。体制と共に歩んだ未来派＝マリネッティだが、終戦によりファシズム体制が完全崩壊する数か月前にマリネッティが亡くなったため、都合のよい一致があったからか、多くが未来派の運動の最後もそこにみるようになっていく。しばしば「未来派1909年から1944年まで」と区切るのは、体制との共存を前提としたいだけでなく、運動の内在的な単一性をみたいがためでもある。マリネッティとの同化により、問題含みではあるが、比較的容易に把握可能な未来派像が出来上がる。

- 4) マリネッティ「未来派宣言」（1909年）に先立つ年代においても、詩人ジョヴァンニ・パスコリの散文（エッセイ？）「幼な子」*Il fanciullino*（1897年）や、作家ルイー・ビランデッロの諧謔（ユーモア）論「ウモリズム」*L'umorismo*（1908年）は、創作者自身が書いた詩論ではなかったか。言葉を媒介とする文学においては、「自分語り」が生じやすくなっていた。
- 5) クルスカ学会のサイト内に設けられた「未来派宣言文集」*Manifesti futuristi*のプロジェクト（<http://futurismo.accademiadellacrusca.org/progetto.asp>）では、テキスト検索が可能である。メモフォンテ財団HPに設けられた、豊富なスキャン画像からなるアーカイブは、若干の評論（当時のもの）を含みつつも、370のテキストを集める。
- 6) Guido Davico Bonino, *Introduzione*, in Id. (a cura di), *Manifesti futuristi*, Milano, Rizzoli, 2009, p. 34. 数値の引用は次の書から行っている。Anna Baldazzi, Alessandra Briganti, Lino Delli Colli, Gaetano Mariani (a cura di), *Contributo a una bibliografia del futurismo letterario italiano*, Roma, Archivio italiano/Cooperativa scrittori, 1977.
- 7) 宣言の和訳は主に次の特集とカタログに収められている。『ユリイカ』（第17巻第12号、1985年12月）、『美術手帖』（vol. 38, no. 572, 1986年12月）、エンリコ・クリスボルティ、井関正昭構成・監修『未来派1909-1944』（東京新聞、1992年、展覧会カタログ）。キャロライン・ティズダル、アンジェロ・ボッツォーラ著『未来派』（松田嘉子訳、PARCO出版、1992年）にも、多くの宣言文が引用されている。2021年に日の目を見た多木浩二の遺稿集『未来派一百年後を羨望した芸術家たち』（コトニ社）にも、11の宣言文の和訳が添えられている。
- 8) これまでなされてきた未来派に関する書誌学的研究（書籍のみ）を、年代順に並べてみる。Anna Baldazzi, Alessandra Briganti, Lino Delli Colli, Gaetano Mariani (a cura di), *Contributo a una bibliografia del futurismo letterario italiano*, Roma, Archivio italiano/Cooperativa scrittori, 1977; Luciano Caruso (a cura di), *Manifesti, proclami, interventi e documenti teorici del futurismo, 1909-1944*, Firenze, SPES-Salimbeni, 1980; Maria Drudi Gambillo e Teresa Fiori (a cura di), *Archivi del Futurismo*, 2 voll., Milano, Arnoldo Mondadori, 1986; Claudia Salaris, *Bibliografia del Futurismo. 1909-1944*, Roma, Biblioteca del Vascello / Stampa Alternativa, 1988; Paolo Bagnoli, Maria Rita Gerini e Gloria Manghetti (a cura di), *Futurismo e avanguardie: documenti conservati dalla Fondazione Primo Conti di Fiesole. Inventario*, Milano, Bibliografica, 1992; Giorgio Zanchetti (a cura di), *Catalogo della collezione di libri e documenti futuristi*, Milano, Archivio di Nuova Scrittura, 1993; Domenico Cammarota, *Futurismo. Bibliografia di 500 scrittori italiani*, Milano, Skira, 2006（「Documenti del MART」10）; Matteo D'Ambrosio (a cura di), *Manifesti programmatici. Teorici, tecnici, polemici*, Roma, De Luca, 2019; Claudia Salaris, *Riviste futuriste*, Pistoia, Gli Ori, 2012（「Collezione Echaurren Salaris」I）; Ead., *Futurismi nel mondo*, ivi 2015（「Collezione Echaurren Salaris」II）; Ead., *Futurismo postale*, Cinisello Balsamo (Milano), Silvana, 2020（「Collezione Echaurren Salaris」III）. D'Ambrosio 2019での成果と、刊行中のエシャウレン・サラリス・コレクションが完結することにより、未来派書誌については決着をみるであろう。前衛に特化した古書店ラレングリオ L'Arengario の貢献も欠かせない。それにしても未来派ほどインターネット時代と相性のよい芸術運動はないかもしれない。オンラインでのデータ集積とアーカイブ作成の場合は、すでに挙げたクルスカ学会とメモフォンテ財団とは別に、829の絵画画像と384の肖像写真と過去と現在の未来派関連展覧会情報を載せるサイト（<https://www.futur-ism.it/homeFM.aspx>）も存在する。未来派だけでなく前衛による雑誌全般を集めたデータベースもトリノ大学のサイト内にある（<https://r.unitn.it/it/lett/circe/riviste>）。
- 9) 伊土戦争前夜、言論の急速な右傾化により、植民地主義にもとづく侵略行為としての戦争が正当化されていく。ゆえに、若き日に社会主義者としてならした詩人パスコリが、数々の愛国的な頌歌を残した晩年に、戦争勃発後、講演「動き出す偉大なプロレタリアート」（1911年11月26日）を催して、熱烈な支持を表明するほどまで、社会全体に好戦熱が高まった。未来派の第一宣言に戦争礼賛が含まれるのには、このような背景がある。

- 10) Filippo Tommaso Marinetti, *Le Futurisme*, Paris, E. Sansot & Cie, 1911.
- 11) F.T. Marinetti, *Le Futurisme / Manifeste du Futurisme*, in «Le Figaro», 20 febbraio 1909. 本稿ではこれを「第一宣言」とも呼んでいる。
- 12) Cfr. F.T. Marinetti, *Guerra sola igiene del mondo*, Milano, Edizioni Futuriste di “Poesia”, 1915, pp. 8, 9, 151, 152.
- 13) F.T. Marinetti, *Per la guerra, sola igiene del mondo*, Milano, Direzione del Movimento futurista, s.d. (ma 1911); riportato senza titolo in Id., *Guerra sola igiene del mondo*, cit., pp. 153-154.
- 14) 「未来派的綜合による戦争」*Sintesi futurista della guerra* はリーフレット形式で、ミラノ本部より1914年9月20日に発行されている。共同署名者は、仲間の画家であるウンベルト・ボッチョーニ、カルロ・カッラー、ルイージ・ルッソロ、ウーゴ・ピアッティである。
- 15) 詳しくは土肥論文「ゲラルド・マローネとナボリの未来派」(『イタリア語イタリア文学』第8号, 2016年, pp. 95-117)を参照。
- 16) あきらかな「もじり」の例として、未来派には与しなかったマローネの協力者であったリオネッロ・フィウーミが「新自由詩宣言」(1913年) *Appello neolibrista* (詩集『花粉』所収, in Lionello Fiumi, *Pòlline*, Milano, Studio Editoriale Lombardo, 1914, pp. 7-13)を通して唱えた「新自由派」neoliberismoがある。未来派のブルーノ・コッラがフィレンツェで展開した「自由派」liberismoや、未来派の「自由態詩」poesie parolibereが意識されていよう。マローネとフィウーミには別の協力者、詩人アウロ・ダルバがおり、彼らはあわせて「前衛派」avanguardiaとして、他の前衛と区別されることがあった。これも一般名詞「前衛」avanguardiaの「もじり」といえよう。

戦争，唯一なる世界の衛生法¹⁾

フィリッポ・トンマーズ・マリネッティ／土肥秀行（訳）

学生諸君のために、未来派とアナーキズム的発想との明確な線引きを、私からしてみよう。

アナーキズムは、人類の進化の永続性を否定し、人類の放物線状の飛翔をさえぎり、ひたすら世界平和の理想にむかわせようとする。大草原での抱擁と、喝采に包まれた愚かな楽園があればよいのだ。

対してわれわれ未来派が決して譲れない原則においては、人間の生理と知性は繰り返し生起し、際限なく進歩する。

われわれは、諸民族の友好や融和などは、超克済みか、超克可能とみなす。そんなわれわれが認めるのは戦争、唯一なる世界の衛生法、である。

アナーキズムが高く掲げる目標は、たおやかな慈愛というが、怯懦と紙一重であり、むしろ民衆の苦悩を生む、汚れた腐敗でしかない。

アナーキストが攻撃するのは、この社会という樹の、政治と司法と経済の枝葉くらいだが、われわれのねらいはその先にある。そんな樹の根は、まるごとひっこぬいて火にかけてしまおう。根は、人々の脳にまで伸びている。人々を支配する根とは、最低限の努力への望み、臆病な精神主義、過去の遺物への執着である。ゆえに人々は、腐敗や病苦を嗜好し、新しきを懼れ、若さを侮蔑する。時間を信奉し、年長者ばかりか、死んだ人や死にかけの人にまで憧れる。本能的に規律を欲し、拘束や足枷が欠かせない。全き自由を懼れてしまっている²⁾。

若き革命家や無政府主義者による集会を見たことがあるか。あれほど残念なものはない。あのアカの心は悉く根から病んでいるので、激烈なる自尊を棄て、集会の進行を最年長者に委ねてしまう。あるいは信念も意気地もない者に仕切らせてしまう。要は、ちっぽけな権威や地位を享受する者に任せれば、物事を現状のままにおさめ、強気を控え、冒険やリスクや英雄心を諫めるのに心をくだくはず、というわけである。

彼らの新たなリーダーは、表向きは議論を公平に扱うものの、ひそかに自分の個人的利益を得る場とする。

革命志士よ、それでもなお集会が有益だというのか。

そうだというのならせめて討論の司会進行に最年少者をおくとよい。もしくは重鎮を避け、無名の者がよい。発言権を均等に与えさせ、手元の時計で計りながら時間配分するのに専念させるとよい。

それにしても、未来派の発想とアナーキズムのそれとの、より深い溝は、愛情という重要な問題への向き合い方にある。愛情の名のもと、感傷や肉欲は人類を強硬に支配する。われわれ未来派は、愛情や感傷、耽溺から、人類を解放したいと切に願う。

注

- 1) 1915 年発表の伊語版 (F.T. Marinetti, *La guerra, sola igiene del mondo*, in Id., *Guerra sola igiene del mondo*, cit., pp. 83-85) を底本とする。初出は 1911 年の仏語版 (F.T. Marinetti, *La guerre, seul hygiène du monde*, in Id., *Le Futurisme*, Paris, E. Sansot & Cie, 1911, pp. 59-62)。
- 2) 仏語版では、「最低限の努力」以下は、次の羅列が続く。「規律への偏愛、最低限の努力の希求、狂信的な家族愛、睡眠と定時の食事の心配、臆病な精神主義、過去の遺物への執着、腐敗や病苦の嗜好、新しさへの恐れ、若さと幼さの軽蔑、時間の信仰、年長と死者と死にかけへの敬い、規律や拘束や足枷の本能的な渴望、暴挙と未知と新奇への恐怖、全き自由への警戒」(Ibid., pp. 54-55)。

勇者宣言¹⁾

ゲラルド・マローネ／土肥秀行（訳）

インドのラム神は、予知夢によって己の務めを識り、弟子にお告げをする。彼が説くのは聖なる炎の教えであり、人間をいけにえとする邪教の野蛮な炎とは異なる。一方、アグニ神の教えは、森に潜み、祭壇にまたたくお清めの炎をもととする。その炎は、犠牲の魂であり、祈りの大胆な跳躍、万物に宿る神々しさの輝き、太陽神の栄光なる魂である。ちょうどヴェーダの不滅の賛歌が繰り返すように。

そこでラムは、ほとぼしる智を使い、臣民を内戦に至らしめないよう、無人の土地を接収することにした。戦とは比類なき災厄であるからだ。勇者でふくれあがった一群は、神の激情にふれ、さらにいきり立ち、堅い意志で世界の涯てまでラムに付き従うことを誓った。

以上のように、記憶は太古の歴史を呼び起こす。現代の燃え盛る群れはむしろ小規模で、熟考を重ねては、敵対勢力をかわしていくが、せめて夢の中だけでもお清めの炎にうったえようとする。森と邑に火を点け消滅させる非情な炎ではない。あの目覚めの響きや星々のまたたきを灯す火である。シンボルとしての炎だ。

この一群は、心の中では別れを覚悟しながら、理解者にむけ、声高でない宣言と適切な主張を、確かな方法で発信する。

短いメッセージでも、ひとつの思考をなす。異種の言葉が聞きなれぬ響きを放とうとも。ラムの美点として挙げられるもののうち、全能に欠くべからざるは、安易な憧憬の拒否である。誰にでもいい顔をするわけではないラムの翳った雲は、心を黄金の輝きで満たす。正統なイニシエーションを受けた信者だけが、その心にふれる。

芸術は、魂が求める率直で純粋なものの極みだが、高みにあって表現され受容されると、ときに無数の人々に野心をかきたてる。それは、確かな生命力であり、浸みのあるきら星、不潔なうじ虫を宿す美しいさなぎだ。しかし勇者の一群にとって芸術は、生の原点であり、世界の根である、ただ一つの驚嘆すべき現実なのである。神聖なる詩篇は、妙なる歌声を響かせながら、燃え盛る曙を想い、鋼の心の重みに震える。純白の翼にのって、蒼の天空を行くのだ。

しかし非の打ちどころのない美の感覚は、信心ある者の専有であるから、これらの勇者は自分たちにとっての真の勝負に挑まなければならない。芸術家の王国に別れを告げ、人々の意見を耳に入れず、様々な運動の影響も受けずにいようとする。

あらゆる流派の上に突き出た魂の白い頂があり、そこで真の芸術家は偉大な作品をかたちにする。

高貴な光は、真の芸術家の魂を誘惑してみるだろう。名誉欲に侵され栄光の幻想にとりつかれるようにと。高貴な光が、芸術家を、一般の期待におべっかを使うだけの貧相なものに変わってしまうようにと。うかれた大衆のみじめな従僕となってしまうようにと。

ゆえに、この少数派は、よくある誘惑を斥け、自らの魂の白き頂にこもり、完全性の理想へ

とむかう。他人の目に拘泥しない。

それでも真の芸術家は、新たな高みに立って、様々な傾向を試そうとする。そこからより美しいフォルムをとらえるためである。それらを一つにし、完全形をめざすためである。

あふれんばかりに感情的であったり、せわしく走行していたり、メタリックなフォルムであったりするのにあわせ、動機と行動の律に従い、思想や美として、より複合的に理解し、真似し、表現する。とはいえ思想は、様々な流派から自由に湧いてくるものである。思想は、芸術とひそかにつながりながら、芸術の進化系としてとらえられる。

「スコラ的な前提をふまえずに定義される流派により、この上なく気高く表出する真実の探求に粘り強くむかうこと、それは無数の可能性のうちに、純粋な観想のうちに、あらゆる抵抗を跳ね除けつつ、少しでも高い美の理想をとらえることに似る。」

このような虚飾ない言葉で、勇者宣言²⁾は綴られるのである。その宣言は、真の宣言を希求する宣言なのである！

未来を先取りする滑稽者も、頑固な過去の礼賛者もない。そうではなく、どんな流派や様式であっても、誠実に美の理念を学ぶ者誰もが芸術の真の騎士である。

唯一無二の詩は、それそのものでしかない。時空を超えて、それ自体なのである。明瞭に語る詩は、太古のリグ・ヴェーダに見劣りしない。夢想の長詩においても、神聖な喜劇においても、パオロ・ブツィ作のその他いろいろにおいてもそうである。感情によって純化された真の直観から湧き出ているのだから。

いまや、対立流派から詩と思想を奪還するための、気迫のこもった戦いに挑む者は誰でも、真に宗教的な関心から、そのうったえが聞かれるべきである。

注

1) Gherardo Marone, *Il manifesto degli Ardimentosi*, in «La Diana», a. I, n. 1, gennaio 1915, pp. 1-2.

2) 「勇者宣言」とは、この文章のタイトルである。実際、タイトルは目次においてのみ表示されていて、文章自体には添えられていない。また起草者の名はどこにも記されていない。雑誌の編集者はフィオリナ・チェンティ（マローネの協力者で、執筆者のひとり）とされているが、実質マローネが全てを取り仕切っており、状況から察するに、本宣言の起草者はマローネである。